

1 単元名 ぼくらの「すべらない話」～ユーモアのあるおはなしをたのしむ～

2 授業構成

(1) 教材に対する反省と新しい提案

本校国語科では、「ことば」に対する感性を磨き、深く追究する授業づくり」をテーマとし、主に独自の単元開発を中心に、研究実践を重ねてきた。年間を通して語彙の習得に力を入れた実践を行った結果、1年間で語彙力は有意性を持って向上したが読解力の伸びは予想したほどの向上は見られず、逆に読書意欲を表す数値が少々下がるという傾向が見られた。そこで、ことばの指導だけに特化するのではなく、物語を純粋に楽しむ気持ちも同様に大切にしなければならないという反省から、昨年度は古事記を題材に取り上げて、実際の舞台となった白兔海岸・白兔神社に行く実体験とお話の世界とを結びつける単元を開発し、ことばの力とお話を楽しむ力を高める相乗効果をねらった。そして、今まではどちらかという読む活動に比重を置いてきたが、今年度は少し方向性を広げて、読むことと話すことを絡み合わせながら、ことばを大切にし、ことばを楽しむような実践を提案したいと考えている。

学習指導要領における「話すこと・聞くこと」では、「大事なことを落とさずに」「順序を考え」「理由を挙げ」「相手の意図をとらえながら」話したり聞いたりして、的確・適切に伝え合うことが重視されている。もちろんそれらの基本的技能を身につけることは小学校段階の児童に不可欠だ。特に低学年においては、「・・・です。」「そのわけは・・・。」などの言い方ができるように話形の学習を重視する。しかし、そのような技能を身につけることと同様に重視したいのが、相手と意思の疎通を測ったり共感し合ったりすることの楽しさを体感することではないかと考える。学習指導要領の中にも「興味をもって」「話題に沿って」話をする事が挙げられているが、その点を特に重要視して指導を組むことは少ないのではないだろうか。

本校の研究テーマの中に「思考を高める」という文言がある。「思考」を「直感・経験・知識などをもとにあれこれと思いめぐらすこと（明鏡国語辞典）」と考えたとき、正確だけでなく直感的な面も学習の中に取り入れることが児童の思考力を高めることにつながるのではないだろうか。つまり、児童は、正しく、落とさず、きちんと話すことを大切にする学習では、正しく話すために「思考」し、もっと楽しんで伝え合うことを大切にする学習では、自分の話をより豊かにするために「思考」するだろう。たとえば、自分が話しているときのその場の雰囲気を感じてことばを付け加えたり、繰り返したりしたとすれば、それは直感的に思考を深めた故の行動だと言えるだろう。日々の児童の様子も観察しながら年間を通して話の技能面・情動面の両方で「思考」の力を高めていこうとしているのが本実践である。

本実践の最終的な目標到達地点は、互いに相手の伝えたいことを受け取り、共感したり反論したり発展させたりし合いながら打ち解けた会話を楽しむことができる力を身につけることだ。そのためには、話す力の優れた友達の話を聞くことや、おもしろい話をたくさん読んだり聞いたりすることにより、そのパターンを体にインプットすることも必要だと考える。そして、話を聞くことや話すことによって人間関係がつくられ心が温かくなるという体験を重ねて、さらに話したくなる状況を育てることをねらって本単元を設定した。

(2) 子どもの学びの実態と期待する学び方

1年生の児童が実際に友だちや担任に昨日あった楽しい出来事などを話すとき、「きのう、温泉に行ったよ。」などの単純な一文で話すことが多い。そのあと、友だち同士で「ぼくも行ったことがある。」と

それぞれが自分の体験や既知の事柄をお互いに言い合うこともよくある。この時期の児童は特に、聞くことよりも話したいという欲望が強いためだ。その話の相手が大人であれば、「誰と行ったの?」「どんな温泉だった?」というように、大切な要素を聞き出し、話が詳しくなっていく。しかし、これは会話ではなく質疑応答である。

本学級では、入学後から朝の会にその日の日直が短いスピーチをするコーナーを設けている。その中に「いつ・どこで・だれと・何をして・どんなだったか・どう思ったか」という要素を入れるよう指導したところ、発表者の話は格段に分かりやすくなった。そして、中には「健太と」ではなく「弟の健太と」というように相手に分かりやすい説明を加える児童も現れた。自分が話したいことだけでなく、相手が知りたいことは何かを意識し始めてきた表れだと考ええる。また、比較的話す力が優れている児童は、起承転結を含んだ話ができるようにもなってきた。なぜかそのような話はたいてい家族や自分の笑える失敗談であることが多い。つまり、話の「オチ」が頭の中にあるので、その面白さを分かってもらえるために必要な情報を無意識のうちにきちんと入れ込んでいるのだろうと考える。

このような児童の様子を見ていて、自分がどれほど楽しかったかなどの感情を伝えるだけでなく、事実を客観的に伝え、それを相手に共感させるやり方で、楽しく分かりやすく話す力を養う事ができるのではないかと考えた。そしてそのためには「オチ」のある面白い話、つまりユーモアのある話が最適なのではないかと考えた。起承転結のある話ができる児童は、そう多くはない。そこで、まず読み聞かせや語りでたくさんユーモア話に触れ、話の起承転結を体感させることから始めようと本単元を計画した。そして、児童には、「人前での形式を大切に話した話し方（スピーチ）」と「2～4人の友だちとのうち解けた会話での話し方（おしゃべり）」の両方を多く体験させ、話すことが楽しい、話すことでもっと仲良くなれたと思えるように学習を進めたいと考えた。

（3） 本時の学習に向けての教材研究

本学級の児童も絵本の読み聞かせ、特におもしろい絵本を読んでもらい、みんなで大笑いして盛り上がるのがとても好きだ。その楽しい場面には、ストーリー・読み手・仲間である聞き手などの要素があり、絵本の絵の力も大きく作用している。しかし、友だちと話をするときには、ストーリーはオリジナルで、読み手（話し手）・聞き手は自分自身と友だちということになり、絵という要素は存在しない。そこで、児童にユーモアのあるお話を提示するに当たって、絵本の読み聞かせから声だけによる読み聞かせへ移行し、さらに語りなど様々な形をとるようにし、絵に頼らずことばで表現し合う力をつけたい。

学校図書館や書店でユーモアのあるおもしろい話を集めてみたところ、「彦一ばなし」のようなとんち・知恵比べのお話が多くあった。他には「とりのみじいさん」などのあり得ないほらばなし、「ふるやのもり」のように双方が勘違いしたまま話が進んでいくもの（これは読み手には本当のことがわかっていてところがおもしろい）などがある。また、物語の設定そのものが変わっていたり常識とは逆になっていたりする点がおもしろい「王さまシリーズ」や「どろぼうがっこう」もユーモアが感じられる。そして、それらにほぼ共通するのが最後に「オチ」があることだ。とんち話や知恵比べでは最後に悪者が懲らしめられ、思いや立場がずれたまま進んだ物語は最後に大変な結末が待っている。どうなることかとわくわく、はらはらしながら聞いていた児童は、最後の「オチ」で「やっぱりそう なった。」とすっきりするようだ。

他にユーモアのある話として、たとえば長新太の絵本によくあるようなことばではうまく説明できないナンセンスなユーモアや、五味太郎の作品によくあるだじゃれを多用したものもあるが、児童がことばを使って表現して人に聞かせる話ができるようになることをめざしている本単元では、そのような分野のユーモアは別のものとして扱うことにした。

これらのユーモアのある話を通して、自分が伝えたいことを伝えるために必要な要素を確実に入れることや、相手に伝わったときの喜びを感じることができるよう実践したい。

3 年間を通した単元構想

《めざす子ども像》

互いに伝え合い、共感したり反論したり発展させたりしながら打ち解けた会話を楽しむことができる子ども。

話せる・聞ける技能面

●教科書単元の中で

- 「はきはきあいさつ」 4月
・あいさつ、返事をする。
- 「みんなにつたえよう」 5月
・みんなの前で話す。
- 「こえのゆうびんやさん」 6月
・指示を聞き取って伝える。
- 「はなしたいなききたいな」 9月
・スピーチをする。
- 「すきなもののクイズをしよう」
・話し合いをする。 11月
- 「きいてつたえよう」 12月
・話の内容を理解しながら聞き、
他の人に正しく伝える。
- 「じゃんけんやさんをひらこう」 1月
・調べたことを説明・報告する。

話したい・聞きたい情動面

●あらゆる学習場面で「おしゃべりタイム」を頻繁に取り入れる。

(学活・道徳・算数・生活・
図書の時間など)

●朝のスピーチを中心に

- ・話す話題をきめる。
- ・黙って最後まで聞く。
- ・大事な事柄を入れて話す。
(いつ・どこでだれと・なにをした・
どんなだ・どうおもった)
- ・足りなかった事柄を質問する。
- ・詳しくする言葉を入れて話す。
- ・質問したり感想を話したりする。
- ・質問に一言加えて答える。
- ・聞く人が楽しめそうな話題を選んで話す。
- ・適度に反応しながら聞く。
- ・となりの人と話す。
- ・一つの話題について、3, 4人の友だちと話す。
- ・グループの中で話をつなげる。
- ・関連したことを話す。
- ・お話を読んだ感想を話し、それぞれちがうことに気づく。
- ・ユーモアのある話を聞いたり、読んだりして、お話の楽しさを感じる。
- ・どの友だちとも、楽しく話す。
- ・初めて話す人と会話を楽しむ。

4 本単元の目標

○ユーモアのあるお話を読んだり聞いたりし、お話を楽しんだり、それについて話をするを楽しむことができる。

○相手にわかってもらうために必要なことがわかり、それを伝えることができる。

5 本単元の学習計画（全6時間）

第1次 ユーモアのあるお話に出合い、親しむ。(2)

第1時 「彦一ばなし」や「ふるやのもり」の話を聞いて、ユーモアについて知る。

第2時 「吉四六さん」や昔話、ほらばなしなどを読んでユーモアのあるお話を楽しむ。

第2次 ユーモアのあるお話を、自分で探して読む。(2)

第1時 「一口童話」や「のはらうた」などの中から気に入ったお話を選ぶ。

第2時 自分が選んだお話を友だちに伝える練習をする。

第3次 ユーモアのあるお話について、話をし合う。(2)

第1時 話すときの注意や、友だちの話に対する上手な反応の仕方を学ぶ。【本時】

第2時 いろいろな友だちとユーモアのあるお話を話して楽しむ。

6 本時について

(1) 本時目標

○ユーモアのあるお話をして楽しむために、話すときの注意や友だちの話に対する上手な反応の仕方がわかる。

(2) 本時の展開 (○教師の意図 ◇全体への支援)

学 習 活 動	教師の意図・支援
1 友だちのスピーチを聞いて、ユーモアのあるところを見つけたり、反応したりする。 ・2名の児童が、最近の話題から選んで短いスピーチをする。 ・スピーチを聞いた児童は3～4名のグループで話し合っ、どこがおもしろかったかを見つめたり、自分が思ったことを話したりする。 ・グループで出たおもしろかったところや感想を発表する。 ・スピーチした友だちの話し方のよかったところを見つける。	○実際のスピーチを聞いて、話し方や聞き方の気をつけることに気づかせる。 ◇ユーモアのある話題を、大事なことを落とさずに話せる児童に話をさせ、良いモデルとしたい。 ○話題に沿っておもしろいところを話したり、自分の思ったことを話したりし、会話を楽しむ雰囲気を感じさせる。 ○聞く人がよくわかるように大事なことをはっきり伝えていることなどに気づかせたい。
ユーモアのあるお話を、グループの友だちとたのしくはなそう・たのしくきこう。	
2 それぞれが自分の選んだユーモアのあるお話をグループの友だちに話し、おもしろかったことなどを伝え合う。 ・今までに読んだ「ひとくち童話」(東君平)や「のはらうた」(工藤直子)などから気に入った話を選んでおき、読む、または話す。 ・聞いた人は、おもしろかったところや思ったことを伝えて会話を楽しむ。	○起承転結のはっきりした話を選ばせ、分かりやすくユーモアのあるお話のイメージを高める。 ○少人数で話をし、おもしろいところなどを話して話題が広がることを楽しめるようにする。 ◇自分で話してもよいし、本(カード)を読んでもよいことにする。 ◇本の他に、1話ずつカード形式にして読めるように準備し、持ち運べるようにして話をしやすくする。 ◇今までに読んだり紹介されたりした本をいつでも読めるように教室に置いておく。
3 友だちとユーモアのあるお話について話した感想を発表する。	○次時に、他の友だちにもユーモアのあるお話をすることに意欲を持たせたい。 ○これからも継続して「スピーチ」や「おしゃべり」を実践していくことを伝え、話すことの楽しさを感じさせたい。